

「政経」の教科構造と指導形態の比較

— 第 2 報 —

高 森 充

1 はじめに

紀要13集においては、政経教科書の内容配列上の問題点を考察し、高校3年の経済分野について、クラス別に指導内容を組みかえ、(マル経的・近経的・折衷的)取扱いとし、三者の授業内容を比較検討した。

このあとをうけて、43年度の実践的研究の目的と内容はほぼ次の通りである。

- (1) 分野の構造と学習順序の検討 経済分野(先習)→政治分野→社会分野の学習順序の効果と問題点。(一般には政→経→社の順序)
- (2) クラス別による教材内容の差異とその比較(マル経的内容と近経的内容を中心に)
- (3) クラス内小集団によるサブ・テキストの学習経過とその問題点

以上から政経分野の教材構造と学習指導の問題点の検討考察をめざしている。

なお、次年度においては、特に中学、「政経社分野」の内容と関連して、中高を通じての、いわば中等教育における政経社＝社会科学的教科の内容構造の実践的検討に進みたいと思っている。

2 分野の構造

「分野の構造」は学問的発想の構造化につながるものとして、広岡教授は次のように述べている。

「分野の構造とは分野教材がもつ知識の基本体系である。分野の構造は、一種の教材構造であるから、最高水準の専門的な科学の基本体系そのものと同じではない。しかし分野の構造は、専門学科のすぐ一歩手前にある、いわゆる科学入門がもつ基本体系にあたるといえよう。たとえば物理分野の構造とは『現代物理学入門』がもつ基本体系であると考えてよからう。——もっともこれでは一般的すぎるから、小学校、中学校、高校に応じて発達段階に、分野の主要内容の系列をとりだすことが必要である。」⁽¹⁾

こうして、分野の構造の一例として、社会科の場合「地理分野」の教材構造例を提示している。そのあらまは、地人相関の動態論的立場から、「地図」→「環境としての自然」→「地域の構造」→「産業と交通」→「世界の関連」の五つの主要領域をとり

出している。そしてこれを、小・中・高校の地理分野の主要内容の系列試案として、簡単な単元構成試案を作成している。⁽²⁾ただし小・中が中心で、高校についての説明がほとんどなされていないのは残念である。

以下、このような、「分野の構造」の考え方を「政経分野の構造」の考察にからめて検討してみたい。

所で、「分野の構造」を学問的発想の構造化として捉えるならば、政経——中でも「経済」分野の教材構造は、学問的＝経済学的立場において、大きく二つに分かれるであろう。その点で42年度以来、高校3年の経済分野について、マルクス経済学的内容系列とケインズを中心とする近代経済学的内容系列の試案を作成し、その比較授業を試みた。そしてほぼ次の2点が指摘できた。

- ① 全体として、B(マル経)とC(近経)の差よりも、A(折衷)とB・Cの差の方が大きい。
- ② マル経、近経いずれにせよ、より系統的、体系的な内容構造をもつものの方が、単なる折衷的、網羅的な内容のものよりも理解がすぐれている。⁽³⁾

43年度の実践的研究は以上の点をふまえながら、特に経済分野の先習と、サブ・テキスト、B組はマルクス、「賃労働と資本」、C組は伊藤光晴「ケインズ」(岩波新書)によるクラス内グループ学習に特色をもたせた。

3 分野の教材構造と内容配列

一般に、学習指導要領においても、現行の政経の教科書においても、分野の学習系列は政治→経済→社会となっている。これに対して、経済分野を先習し、→政治→社会分野の学習順序に組みかえ、内容についても、先に述べたようにクラスによって思い切った違いをもたせてみた。その場合、経済分野の構造は経済的発想の構造化として、マル経的内容と、ケインズ経済学の近経的内容を中心に、対比的にとりあげた。

表1 内容配列と指導過程の比較

	B 組 (マル経的内容)	備考	C 組 (近経的内容)	備考
1 (経済的分野) (22時)	<p>I 資本主義経済のしくみ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 経済学の系譜とマルクス 2. 経済の発達史 (マル経は経済史をどうみるか) 3. 資本主義経済体制の特徴 <ol style="list-style-type: none"> (1) 生産のしくみと資本の運動 (2) 剰余価値 (3) 拡大再生産と経済循環 <p>II ミ賃労働と資本ミをめぐって —サブ・テキストの学習—</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 賃金とは何か 2. 商品生産と価値法則 3. 資本とは何か 4. 資本と労働の対立 5. 資本主義の発展とその方向 <p>III 現代の資本主義経済</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 資本の集中と独占 2. 国家と独占資本主義 	<p>講義 学習 (11時)</p> <p>グループ学習 (7)</p> <p>講義 (4)</p>	<p>I 現代の資本主義の特徴</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 近代経済学の系譜 2. 資本主義の経済体制 3. 資本主義の危機とケインズ 4. 国民所得モデル <ol style="list-style-type: none"> (1) 国民経済の循環 (2) ケインズの所得モデル <p>II ミケインズミをめぐって</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 三つの階級・三つの政党 2. ケインズの思想 3. 新しい経済学の誕生 (一般理論の骨組み) 4. 現代資本主義とケインズ経済学 <p>III 現代の資本主義経済</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 景気変動と金融・財政政策 2. 新しい病い—しのびよるインフレ 	<p>講義 学習 (12時)</p> <p>グループ学習 (7)</p> <p>講義 (3)</p>
2 (政治的分野) (25時)	<p>I 近代政治のしくみと本質</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 政治の機能と国家の本質 (階級国家論をめぐって) 2. ブルジョア革命と民主主義 3. 近代政治の社会経済的背景 4. 各国の政治体制 <p>II 日本国憲法の基本問題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 明治憲法体制と新憲法体制 2. 基本権の体系 <ol style="list-style-type: none"> (1) 基本権保障の前提条件 (2) 自由権の基本権 (4) 社会権の基本権 3. 労働問題と労働基本権 4. 日本政治の諸問題 	<p>(バズ)</p> <p>講義 学習 (18)</p> <p>(バズ)</p>	<p>I 近代政治の原理と制度</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 政治の機能と国家 2. 近代政治と民主主義 3. 民主政治の制度的側面 (人権の保障と権力分立制) 4. 各国の政治制度 <p>II 日本国憲法の基本問題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 日本国憲法の制定過程 2. 新・旧憲法の比較 3. 基本権の体系 <ol style="list-style-type: none"> (1) 自由権の基本権 (2) 社会権の基本権 4. 労働問題と労働基本権 5. 日本の政治の諸問題 	<p>講義 学習 (20)</p> <p>(バズ)</p>
3 学期 (6時)	<p>III 国際関係</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 国際社会と国際政治 2. 国際関係と日本 		<p>III 国際関係</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 国際社会と国際政治 2. 国際関係と日本 	

- (注) ① 政治的分野については、経済的分野のようにB・Cクラスの内容に著しい差はないが、Bについてマルクス政治学的バイヤスをかけて取扱った。
- ② 社会的分野については時間の関係で、政治分野の最後の所で基本権と関連づけて取扱った。
- ③ 「バズ」はバズ・デイスカッションを意味する。
- ④ 単位数は2単位、年間70時であるが、高3における時間配当の実情は3学期はほとんど数時間に過ぎず、全体として、53時間を予定した。

4 講義による授業過程と自発学習 (グループ学習やバズ学習の導入による)の事例研究

(1) 講義による授業過程

講義による授業は、高校教育の現場では一般的、支配的な学習形態であり、私の場合も、先の表1の通り年間の授業時数の80%は講義を中心に進めている。従って、授業の方法に特別の変化はないが、内容と授業過程の実態を示すものとして「授業記録ノート」から、B組(マル経)、C組(近経)を対比して、その事例を示すことにする。

例I B組(マル経)

「生産のしくみと資本の運動」(表、Iの3(1))
5/20(月)

財の価値の決定

近経：効用の大きさと稀少性が交換価値を決定 効用と稀少性のかねあい

マル経：財の価値

(使用価値)互いに矛盾している

この矛盾によって商品となる
労働力の価値によって決定

資本主義

資本をもとでにして利潤をうむ

目的、働き、本質

企業のもとで 貨幣資本 → 生産資本

$G - W \left\{ \begin{array}{l} Pm \text{ 生産手段} \\ + \\ A \text{ 労働力} \end{array} \right. = P = \text{生産}$

↓商品化
自由に売買される……買い入れられる

$P - W' = G'$

生産 商品 売る $G' - G = g$ ……利潤

(生産費+もうけの見込)
コスト

資本の本質

近経

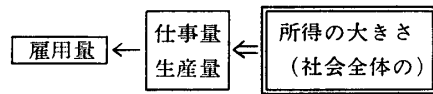
マル経

固定資本 (機械 道具・減価償却費) } 生産手段 = 不変資本

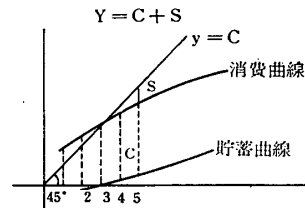
流動資本 (原材料 労働力) } = 可変資本 → 剰余価値 → 利潤

例2 C組(近経)

「ケインズの所得モデル」



$$\begin{array}{|l} \text{所得} = \text{消費} + \text{貯蓄} \\ Y = C + S \end{array}$$



所得 Y
 $\frac{C}{Y}$ = 消費性向 $\frac{\Delta C}{\Delta y}$ = 限界消費性向
 $\frac{S}{Y}$ = 貯蓄性向 $\frac{\Delta S}{\Delta y}$ = 限界貯蓄性向

Y	C	S	C/Y	S/Y
20,000	28,000	-8,000	1.4	-0.4
30,000	30,000	0	1	0

(2) 自発学習(グループ学習やバズ学習の導入)による事例研究(Sample Studies)

次に、昭和43年度の場合、年間授業時数の20%を自発学習にあてる計画を立てたので、ここでは特にグループ学習による生徒研究発表の例を、B組(マル経)とC組(近経)を対比して示そう。

なお、グループ学習の進め方は次のように行った。

1) グループ編成

① 1グループは原則として男5+女3=8名で組織し、グループ代表1(司会を兼ねる)と書記1をきめる。

② 司会者を中心に各グループ内の分担をきめる。

2) テキスト

B組(6グループ)

テキスト：マルクス「賃労働と資本」(国民文庫版)各自1冊ずつ。

C組(6グループ)

テキスト：伊藤光晴「ケインズ」——新しい経済学の誕生——(岩波新書)各自1冊ずつ

3) 配当時間

第1時(グループ編成と役割り・分担の決定)

第2~4時(グループ検討会→まとめ)

第5~7時(クラスへ発表、必ずプリント添付)

例3 B組(マル経、生徒発表)

「賃労働と資本」

I 各章まとめ

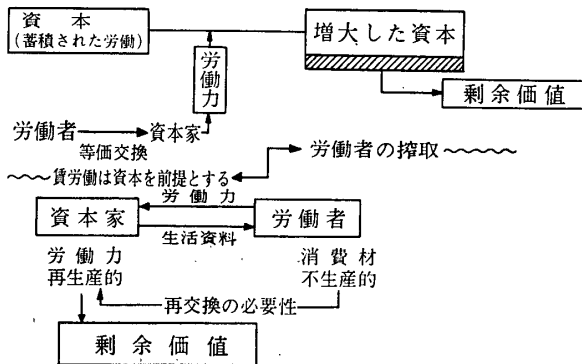
1. 賃金とは—→資本家がいとる「労働力」という商品の価格
2. 労働価値—→賃金=労働力の生産費
(生存費
繁殖費)
3. 資本の分析

-----生産関係は社会関係を形づくる-----

- 一定の社会関係(ブルジョア社会)のもとで初めて資本となる。
- 物質的生産物と交換価値から成る—→等価交換による不変性

-----「生きた労働」が蓄積された労働のために交換価値を維持し、ふやす手段として役立つ-----

- 資本の運動による剰余価値



4. 資本家と労働者の利益の対立—→相対的地位の悪化
5. 資本主義の発展と労働力—→労働者階級の絶対的貧困化

-----それにもかかわらず資本の急速な増大は、賃労働者にとって、もっとも有利な条件-----

II 疑問点

P46 L I ○資本もまた1つの社会的生産関係である

L II ○交換価値の社会的量の一総和である

P48 L 2~10 ○独自の社会的力として、すなわち社会の1部のものの力としてみずから維持しふやす

P49 L 7~8 ○この貴重な生産力を……うしなってしまったわけである

P52 L 10 ○彼(労働者)の運命は資本に依存している

III その他意見

1. 等価の資本、等価の労働力による異種の生産物商品がはたして、等しい交換価値を持ちうるだろうか?
2. 等価交換により得た労働力と資本により、新しい生産が行なわれ、剰余価値がでる。しかし、もし需要が少なく商品が売れなかった

らそれでも剰余価値の増大は可能か? それでも資本は増大するか? 労働力の需要は増大するか?

3. 労働力がどうして資本に「前もっていた以上の価値」を与えるか?

例4 C組(近経, 生徒発表)

新しい経済学の誕生—→一般理論の骨ぐみ

III 新しい経済学の誕生

1. 新しい現実, 古い理論

恐慌による失業者の増大で失業手当が莫大になった。他方税収入は不景気のため増加しない。だから財政は赤字になり資金はロンドンから外国に逃げだし、輸出も不振になる。その結果イングランド銀行も金本位制の維持困難になり危機に陥った。

そこで、マクドナルド首相は危機をのりこえるため支出の切り詰め、失業保険への補助金の支出を切りつめることを考えた。これにより内閣は、自由党・保守党・労働党に分裂。

2. 一般理論の骨ぐみ

新しい労働市場

現在の賃金でもっと働きたい人—X

現在の賃金で雇われる人数—Y

X - Y = 非自発的失業者

労働の伝統的な理論

国全体の雇われる人数には変化なく、ただ各人の労働時間が長くなったり短くなったりしているのを示す。

乗数理論

$$\text{乗数} = \frac{1}{1 - \text{限界消費性向}}$$

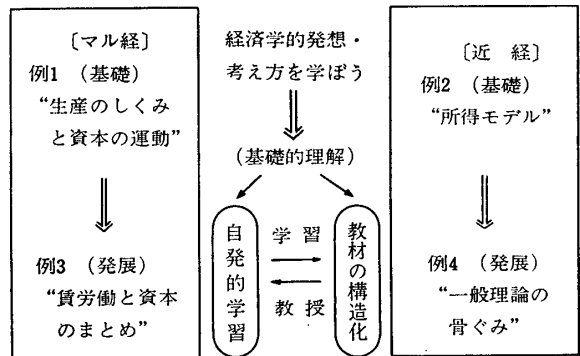
所得 = 消費 + 投資 (投資は貯蓄)

10 9 1

10 8 2

以上の4つの事例を、指導のねらいを中心に図式化すると次のようになるであろう。

(目標)



経済の構造的・発展的理解

所で、このような目標はどの程度に実現したであろうか。問題点を中心にあげてみると、

経済学的発想→経済学分野の構造→教材の構造化というアプローチと、生徒の自発的学習（グループ学習）との対応関係に学習不適應が生じないか。

換言すれば、経済分野の学習は政治分野にくらべて、一そう抽象的、理論的思考を要求されるが、このような困難にも拘らず、経済単元先習の優位性を主張できるであろうかという問題である。

結果は簡単に断定できないし、効果を見る指標が問題であるが、授業記録ノートに現われた感想などから見る限りにおいては、「経済の勉強は難かしいが重要である」といった受けとめ方が多い。二三の例をあげてみると、

例① 初め、経済学を学ぶことは極めて難かしいと感じたが、しかし、これは極めて重要である。現在の日本における様々な社会的矛盾を理解することさえできない我々は、少しでも経済について学び研究することが必要であろう。

(B組, 男)

例② 今まで、このノートを書いている人もいっているようだが、私は正直いって経済の勉強にあまり興味が無い。どちらかといえば政治の方に興味があるといえる。だから政治の時間を心待ちに待っている。しかしよく考えてみれば、政治と経済とはいつの時代においても密接な関係にある。その国の経済をリードしていく立場にある人は政治をもリードしていけるのだ。(C組, 女子)

従ってここでは、不十分ながら、政治は経済の集中的表現であり、経済的背景の下で政治も動いていることへの認識がある。このような認識は、経済分野の先習の中で芽生えたものと言えよう。しかし、このような初歩的な社会科学的認識が、持続的に、政治分野の学習に生かされ、公式的ではなく、発展的な思考につなげるかという点、必ずしもそうではない。次の例のように政治に対する皮相な、感覚的捉え方も多い。

例③ 現代において、政治家とは政治ヤのことだ。どの党が政権をにぎればよいか、どこでも同じことである。ようするに一般国民には、一部を除いて、どの政党が政権をとろうと結局生活には大差がないのだ。(B組, 男)

このように政治に対する、政治的不信や、ショート・カット的意見の反面、一方では政治に対する根源的な問いかけがあることも事実である。

例④ 我々が憲法問題、安保問題などを真剣に考えるのは、時の流れ(世相)がそうさせるのか、それとも、必然的に高校生として考えるようになるのか。前者を含みつつ、当然後者が——つまり、各自が現在の自分と社会を深くみつめることが重要だと思う。(C組, 男)

高校生は、自分とのかかわりで社会を深く見つめたいという意識を強くもっている。にも拘らず、一般には、受験勉強の重圧や、社会や家庭でのムードは高校生の政治教育に否定的である。しかし、健全な政治意識は、早くから学校や社会や家庭で、政治教育を受け、政治的に行動する力を身につけさせるべきであろう。こんにち、正しい意味の政治教育は、高校教育の場では不在であるし、大学の中では政治が過剰なまでに紛争をまねき、対立を激化させている。その意味で、高校生の社会意識と政治への関心に応えうる授業の質と高校教育の在り方に対して、常に教師としての力量への反省が要求されているといえよう。

5 テストの結果と考察

テストは、中間テストと期末テストの2回を主として利用した。〔表1〕の指導計画表で、それぞれⅠの「資本主義経済のしくみ」(B組, 11時)と「現代資本主義の特徴」(C組, 12時)を終えた所で、中間テストをした。一方、Ⅱはグループ学習を中心とし、B組が「賃労働と資本」、C組が「ケインズ」をグループ学習で行い、まとめとして、現代の資本主義(Ⅲ)を3~4時間で実施した。期末テストは1題(選択)を除いて、B、C両組とも同じ問題で行った。テストの内容は、中間テストでは、①経済思想史、②家計の所得モデルから消費性向、貯蓄性向を求める、③1910年から1960年の景気変動(グラフ)に関するもの④資本の循環と運動及び資本構成について。

期末テストでは、①資本主義の発展と経済政策、②資本と労働及び生産関係、③価格決定(市場理論)④投資の乗数効果(近経)・剰余価値(マル経)の選択。

以上の問題について結果を簡単に比較すると、

〔表2〕

	中間	期末
B (マル経)	72.8	69.2
C (近経)	76.9	70.4

これによってみると、期末の場合のように、グループ学習中心のテスト結果は、講義(中間)の場合よりもやや成績が悪いが、B・C間の差はない。講義中心の中間テストについてはB(72.8) < C(76.9)となっている。教科書の扱いは、両クラス共、かなり離れ

「政経」の教科構造と指導形態の比較

ているが、Bの方がその割合がより大きかった。

ともかく、42年度（紀要13集参照）の場合も、B (60.3) < C (64.7) の結果が出ており、本年度も同じような傾向が見られることが注目される。

おわりに、簡単な調査の比較をみると、

(表3) 資本主義における景気変動について

	B 組	C 組
ア、経済恐慌はいつか必ず起る	58%	35%
イ、不況や景気後退は起るが、調節可能である	40	60
ウ、修正資本主義の政策により、恐慌は起らない	2	4

(表4) 将来の日本経済

	B 組	C 組
ア、もっと経済がのび、高度成長	18%	38%
イ、経済はのびるが、歪みが大きくなり、のびなやむ	44	49
ウ、高度成長は終り、ゆきづまる	28	18

いずれも、C組がやや楽観的な経済の見通しを立てているのは、やはり、学習内容からの影響によるのであろうか。

最後に、グループ学習についての受けとり方は

(表5)

	B 組	C 組
ア、今後もやってみたい	51%	34%
イ、余り効果なし	35	50
ウ、どちらでもよい	14	16

これは、テキストの難かしさが関係しているとも考えられるが、B組の方が積極的である。もっとも、C組についても、2学期の半ばに政治の学習について「一学期にやったグループ研究のような事を又やって欲しい。お互いに考えを交換し合うのは、広い視野で物事を見ることができるようになる」と主張している例もあり、バズ、ディカッションなどの導入も生徒からの要望の多いことを付記しておきたい。

- (注) (1) 「教育内容の現代化」P.135~137 広岡亮蔵 明治図書 (67)
- (2) 同上, P.146~147
- (3) 「名大教育学部, 附属学校紀要第13集」所収拙稿「政経分野の内容構造の問題点」
- (4) 「授業記録ノート」は男・女各1名ずつ、各授業時間の記録を担当、(出席番号順)、その日に提出を求め、次時のはじめに教師が補足したり、感想について批評する。